慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	丸山真男著 日本の思想
Sub Title	
Author	石坂, 巌
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.3 (1962. 3) ,p.316(108)- 317(109)
JaLC DOI	10.14991/001.19620301-0108
Abstract	
Notes	社会思想史研究特集 新刊紹介
0	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620301-0108

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

とされている。 と、忍耐が必要なのだとも考えさせられる」 新渡戸のような寛容と思想の柔軟さ、自由さ

三二二頁・六五〇円) の筆をとった次第である。(創文社刊・A5・ 豊かな問題提起をしているので、あえて紹介 ここはその場所ではないから別の機会を待ち 関連につき論ずべき点を多くもっているが、 たい。見られる様に、思想史研究の上に実に 筆者は右の諸論文につき、又各論文の相互 勝己—

書に収められた理論のうち、われわれに身近 問題の基本点と、それが今日の日本の産業経 かな問題性をもつものを指摘しておこう。 営社会につながる問題点をのべ、最後にこの ここではむしろ、 内容の紹介は、いまさら必要ないであろう。 雑誌においてとりあげられている。それ故、 この書物については、すでに多くの新聞、 丸山教授により提出された

これが日本の思想の特徴である。

思索的苦闘の成果が本書なのである。 出すべき足場と契機をさぐり出そうとした、 識と反省から、日本の思想史的構造を出来る 世界の思想的産物が日本の思想史のなかにス れの精神的成長を育くんだ思想的伝統から脱 かぎり明晰に分析し、それを通じて、われわ 意味での原理的な思想が形成されなかった伝 想を全体として位置づけるような、そういう る。」つまり、 の足跡を印したあらゆる思想の断片に行き当 トックされている事実、しかもそれらの各思 儒教的なもの、 の考え方を分解してみると、「仏教的なもの、 把握が教授の問題の出発点である。われわれ このような日本の思想的伝統に対する認 千年以前の昔から現代までの -要するに私たちの歴史にそ シャーマニズム的なもの、

こに理論化された日本思想の構造的関連のな 示す方向をさぐらねばならない。第二に、 想的運動の軌跡を追求すると共に、そのさし は第一にこの書中に投影された教授自身の思 合しているのである。したがって、われわれ 的思想の歩みとその際きざまれた問題点が、 日本思想の史的構造の考察、分析と見事に融 その意味で、ここには、丸山教授自身の内 自分たち自身の問題をくみと ح

れぞれの思想的軌道の確立が要求されるので

そのような角度から、 つぎに二つの問題を

じこもって、労働者階級として企業を越えた 経営組織をもち、それに対応して労働組合も 成は知識集団、イデオロギー集団にのみ行わ 横の組織に 広がるべき、 にもかかわらず、日本の労働者は企業内に閉 そして企業別組合である。 終身雇傭制、 つかっていることは、あまりに周知であろう。 組織の近代化にあたり、厚いタコ壺の壁にぶ またタコ壺組織をもっている。労使双方とも れているのでない。日本の企業もまたタコ壺 の社会をタコ壺文化としてあざやかに規定さ 「タコ壺文化」として比喩的に 表現し、 り、そこに共通の広場が形成されない社会を イデオロギー集団が 閉鎖的 な タコ壺を なし のカルチュアーのある社会を「ササラ文化」 あげようと思う。 それぞれの内部でのみ仲間言葉をしゃべ 丸山教授は、社会の基底に伝統的な共通 さてわが国においては、タコ壺集団形 「タロ壺文化」と「ササラ文化」の間 最初から専門的に分化した知識集団 年功序列体系、 共通の 社会的 基盤 総評や全労の呼号 閉鎖的労働市場

全体像の 正しい 把握に なるという わけであ という二重の側面でとらえることが、 命をイギリスの市民革命とピューリタン革命 危険があると考えるのである。従って英国革 く表わしていたことを無視もしくは軽視する とは英国革命が宗教的観念や利害の対立を強 の市民革命的とらえ方を一面的に主張するこ 認するのである。しかし同時に著者は、後者 来の市民革命としてのとらえ方の積極性を承 らえ方に対しては、クリストファ 革命の ヒル以

析によって始めて英国革命の全体像も十分な 示しているし、 展に対決する近代社会思想の諸類型の原型を 農民の民衆グループの思想と行動 なの 的に役割を果した人々の思想と行動よりも、 命的エネルギーの供給源となった手工業者や むしろ革命の基本線から脱落しながらも、 の課題である資本主義的生産力の推進に積極 かもこの場合著者が注目するのは、 関係の中で描きだそうということにある。 英国革命の把握の上で当時の社会変革活動と その行動を支えた思想を生き生きとした対応 さて著者の問題意識の第二は以上のような 何故ならこれらの諸思想は資本主義の発 またこれらの思想と行動の分 市民革命 で 革 あ

丸山真男著 II 本 の

問題の基本線。いろいろな思想の雑居

自ら悩んで なタコ壺組織体をなして、生産性の原動力と に他の経営体に対しては、 しての機能的原理の発動にブレーキをかけ どのこまか 日本の社会主義政党の弱さはこの点にある。 共通の考え方も、 日本の経営者たちは、 学歴別、 いるのである。 いタコ壺群の中に押しこめ、 もち得ないのである。 世代別、 自身が一つの大き 自己経営内部の 地域別な さら

きな位置は、 である。慶応義塾の日本近代史上における大 成と慶応義塾との深いつながりが結ばれたの まさにその点にこそ、近代日本資本主義の形 本の先駆的代表として福沢先生をあげる時、 値が、資本主義的近代経済社会に典型的に打 る。そして丸山教授が「する」価値の近代日 ち出されたことは、説明の必要ないことであ 対置させた。 機能的原理としての「する」価 「である」価値または「である」論理として 教授は、「する」価値または「する」論理と、 白な対極を形成する。 その存続維持を第一とする前近代的原理と明 近代的原理であり、制度を身分化し固定化し、 のべた機能的原理こそ業績本位を本体とする 右の「する」価値の主要な拠点 価値と「である」価値。右に この相対立する原理を

> のである。 察に強力な手がかりを与えないではおかない このことを教えると共に、そのための自己省 ない。丸山教授の「日本の思想」は少くとも、 題であるが、その革新的主体は、われわれ自る生命力を吹きこむことこそ、われわれの課新することにより、かえって伝統に永続性あ 身により、 を生かすことは出来ないであろう。伝統を革 よく保持させているであろうか。権利の上にれはこの伝統、 つまり、「する」 価値原理をたるところにあったのである。今日、われわ 眠る者に法的保護が与えられないと同じよう 伝統の上にあぐらをかく者にはよく伝統 (岩波新書・一九二頁・一〇〇円) 自身のうちにうみ出されねばなら —石 坂

田村秀夫著

『イギリス革命思想史』 -ピューリタン革命期の 社会思想

方にある。すなわち著者は一方で英国におい て伝統的であったピューリ から六〇年に到る英国の市民革命の把握の仕 本書の著者の問題意識は第一に一六四〇年 タン革命というと

一 〇 九 (三十七)

紹